

伝統技術とCS重視で新たな価値づくりに挑戦

株式会社 吉年 大阪府河内長野市

長い歴史に培われた伝統技術をもとに、可鍛鑄鉄・ダクタイル鑄鉄を製造しているのが、株式会社吉年である。水道・ガス用管継手、自動車部品、鑄鉄異形管、各種産業機械部品を大手鉄鋼メーカー、管材商社、自動車部品加工メーカーなどのユーザーに供給している。

縁の下を支えている素材産業（Supporting Industry）であるが、社員が一丸となって豊かな社会を築くための重要部品を生産しているという意識を持ち、お客様第一主義でニーズに合った新たな価値づくりに挑戦している。

会社概要



会社名：株式会社 吉年
所在地：大阪府河内長野市 上原西町 16-1
電話：0721-53-3121（代）
創業：1781年（享保3年）
設立：1944年2月
資本金：5,500万円
代表取締役社長：吉年 正守
従業員：220名
事業内容：管継手、自動車部品、
鑄鉄異形管、鉄道車両
部品、産業機械部品、
碍子金具
URL：<http://www.yodoshi.co.jp/>



本 社

鑄物業界のパイオニア

大阪府南東部の河南地方は、古くから大陸文化が大和に入る交通路にあって、比較的早くから文化が開けたところである。そのうえ、鑄物に適した砂、良質の木炭を産したことから、なかでも河内・丹南地方（現・羽曳野市）は奈良時代以前からの鑄物の生産地として古文書に記録が残っており、鑄物業発祥の地として伝えられる。

同社の創業は享保3年（1718年）と江戸時代中期にまでにさかのぼる。吉年家第16代当主與右衛門氏が鑄物師108人衆のひとりであった田中氏から事業を受け継いで、河内長野の現在の地で創業したのが起こり。以後、鑄物師として、釣り鐘、鍋、釜、農具などを生産し続けた。

明治37年には英国人技師の指導を受け可鍛鑄鉄の製造を開始。これが日本可鍛鑄鉄の始まりとされており、同社は鑄物業界のパイオニア的存在といえよう。

お客様第一主義

同社は、300年近くにわたる鑄物づくりで培われた伝統技術をもとに、現在では管継手、自動車部品、建築材料部品、公共事業用水道設備部品、鉄道車両部品などの各種産業機械部品を製造・販売している。さらに、プラスチック製のコーティング、射出成形にも取り組み、最近では防食性に優れたステンレス製管継手を販売し、売上高に貢献している。

同社では「よりよい製品をより安くより早く」をモットーに、Q（Quality）、C（Cost）、D（Delivery）の管理に徹し、お客様の満足と信用を得ることを経営の最大理念としている。

豊かな社会を支える製品群

同社の主力商品である、水道管やガス管などの管継手は、可鍛鑄鉄を使ってつくられる。給水・消火・空調・衛生・ガスなどの配管材として使用され、全国シェアは約10%に及ぶ。自社ブラン

ドの他、大手金属メーカー向けのOEM製品の供給も手がける。

最近では、水道水の給水配管における赤水現象や錆コブによる流量低下問題、安全でおいしい水への要望など、配管機材にも高い基準が求められる。同社では、これらの問題・要望にいち早く取り組み、環境・リサイクル・防食対策用として、ステンレス製のメカニカル管継手とねじ込み管継手を開発、今後伸びる分野として高い期待が寄せられている。このように、同社では耐えざる研究改善を重ね、最新の製造設備により安定した品質の製品を量産する体制をつくり上げている。



サスフィット（ステンレス製メカニカル管継手）

一方、引張強さと伸びの高いダクタイル鋳鉄や、強度と切削性に優れたパーライト可鍛鋳鉄からは自動車部品や産業機械部品が、特殊な熱処理で特殊鋼と同等の強度を持たせたダクタイル鋳鉄からは建築材料部品など、多品種の製品を製造している。また、同社の鉄道車両部品は品揃えが豊富で、ほとんどの車両メーカーに供給するなど、各種業界へ確かな製品群を供給している。

マレーシアへ海外進出

同社は今から30年近く前の1976年にマレーシア・マラッカ州で「ヨドシ マレーブル マレーシア」（現在従業員数240名）の操業を開始している。当初数年間はアメリカ向け管継手輸出を主体に操業を行っていたが、その後10数年間は、マレーシアの高度成長と共にマレーシア国内販売が中心となり、高層ビル建築用管継手、自動車部品等を製造した。97年のアセアン通貨危機以降は、マレーシア国内需要が減少したため、翌98年6

月にJIS認定工場の資格を取得。現在では日本向け輸出が主体となり、日本の分工場的な役割を果たしている。

また、海外からの調達はマレーシアだけにとどまらず、海外進出の経験を活かし、中国・韓国の協力工場と連携し、国際的な生産・調達ネットワークを築いている。



鋳造ライン（APK-4Lライン）

創意工夫とチームプレイでコストダウン

現社長の吉年正守氏は鎌倉時代から続く名家・吉年家25代目の当主。18年前に若くして社長に就任したこともあり、いまなお52歳の若さ。吉年家の伝統を引き継ぎながらも、新しい経営感覚でコストダウン、生産性の向上など経営全般の見直しに目を光らす。

現在、コストダウン対策として、VPM（Value Producing Management：価値を生み出す管理改善活動）手法を導入。仕事の簡素化・人の能力向上（意識改革）を行い、生産効率の向上、不良・クレームの削減、在庫の削減を徹底し、高生産性・高品質・低コストで顧客要求に俊敏に対応できる企業体質を目指している。

また、全社的運動として関係部門と協力して、部門目標・職場の改善目標を達成していくマネジメント力を強化し、部分最適から全体最適への意識改革の推進と、技術伝承・多能工化の教育により作業の標準化も推進するという。

長い伝統のうえに築き上げた技術力に近代的な経営手法がミックスされ、新たな企業価値が生み出されようとしている。

（井阪、島田）